

神殺しの巫女

県立武岡台高等学校

一年

青崎真伊子

今日も雨が降っている。

学校からの帰り道、都は日課となっている本の立ち読みをしにコンビニへ向かった。コンビニは素晴らしい。こんなに小さな場所に生活に必要な物すべてが揃っているのだから。

都が雑誌コーナーのとある漫画雑誌を手に取り読んでいると、「都ちゃん、何してるの」

後ろから声をかけられた。振り返ってみると、声の正体は黒々とした長い髪に赤いヘアピンの同級生、神野美琴だ。

「うお、なんだ、カミコか。驚かさないでよ……」

「立ち読みするのは店の迷惑だし、やめなよ」

「買いなよ、と彼女は言う。買うにしても今日はお金を持ってきていないから買えないのだが。」

「自分お金ないし」

「バイトすればいいじゃん」

ぶっきらぼうに言う彼女に、うちの学校はバイト禁止なん

だよと心の中でツッコんだ。美琴はこういう少し常識から外れたことを言う変わった奴だった。自己紹介でオペラをやった、学校では奇天烈カミコの名で通っている。消極的で自己肯定感の低い都とは正反対の人物であった。

「突然ですがクイズです」

おどけた調子で美琴が言う。本当に突然だ。

「どうしても私はカミコと呼ばれているのでしょうか」

「なんでって、神野美琴だからでしょ？」

別にあだ名なんてそんなものだろう。しかし彼女は、

「はい違います。初代総理大臣が芥川龍之介ってくらい違うよ」

「意味わかんないんだけど」

しかし神野美琴が由来じゃないとしたらいったい何だというのだろうか。

「正解は、私が食べ物をよく嘔むからでした」

嘘っぽい。都は思う。クラスの中では食べるスピードはトップクラスなのだが美琴が言うならまあ、そうなのだろう。

へえ、と気のない返事をしてまた雑誌を読み始めた都にムツとしたのか、

「前置きはこのくらいにしてこっちを見なさい」

口調を強めて言った。

「なんだよ、今までののはただの雑談じゃなかったのか」

心底面倒くさそうに都は返す。美琴はキュッと真剣な表情になって言った。

「今日の夜、深見沢神社に来てほしい。見せたいものがあるんだ」

「深見沢神社だって？」

深見沢神社。それはこの町にある小さな古びた神社で、道中は暗く陰しいので人々はあまり近寄らない場所だ。なのに彼女はあえて夜に来いと言うのだから意味が分からない。

「なんだってそんなところに行くのさ？」

すると彼女はあははと笑って言った。

「決まってるじゃん、神様を殺しに行くのよ」

一瞬、都は目の前の少女が何を言っているのかわからなかった。神を殺す？いくら彼女が奇天烈でもそんなこと高校生がいったら間違いない黒歴史モノだ。もしやこいつは患っているのでは、なんて思ってしまった。啞然とする都に美琴は、

「信じられないかもしれないけど、本当のこと。私、神を殺す仕事をしているの」

また真剣な表情に戻って言う。

「本当に？」

「別に信じなくてもいいからとりあえず来てほしい。なるべく動きやすいカッコでね。どうせ暇でしょ？」

都は暇だった。

そして夜。昼間降っていた雨はなりを潜め、空には煌々と輝く満月が浮かんでいた。そのおかげで神社への道は割と明

る。曖昧な脳内の地図を辿りながらなんとか神社へたどり着く。石階段は苔が生え、石灯笼はひび割れ、長く人の手が入っていないことは明らかだった。こんな汚いところに果たして神はいるのだろうか。そう思いながら赤い鳥居をくぐったところで、

「おお、やっと来たね。待ちくたびれたよ」

ふと頭上から声が降ってきた。見上げてみると、鳥居の上に誰がいる。……あれは、カミコか？

「あんた、カミコなの？」

恐る恐る聞くと、そうだよ、と聞きなれた声が返ってきた。

鳥居から飛び降りて見事な着地を決めた後、

「やあ、こんばんは。神野美琴だよ。こんな格好でわからないかったかな？」

長い髪を上で一つにまとめ、赤いリボンで結っている。そして彼女が着ているのは、赤と白の巫女装束。これだけで決定的だ。彼女は巫女。服装だけではない。オーラが出ているのだ。都はこれまでおみくじ売り場にいるアルバイトの巫女しか知らなかったが、彼女は違う。本物だ。神を祀り、仕える、本物の巫女。しかし昼間彼女は神を殺すと言っていた。巫女でありながら神殺しをするなどという大きな矛盾を抱えているのには、彼女なりの理由があるのだろう。

「服装それで大丈夫？ かなり寒そうだけど」

心配そうに美琴は聞く。今の都の服は中学時代の部活動で着ていたオレンジのポロシャツに体操ズボン。運動にベスト

な格好で、なんて言われたからこれで来たのだ。

「それでもないよ、自分は大丈夫。それより今気づいたけどカミコのその袴もなかなかだよね」

「おお！ よく気づいたね」

白衣には何も無いが、緋袴には白い糸でペイズリーが刺繍されている。ふふんと誇らしげな美琴。正装に刺繍とは如何なものか。奇天烈カミコの名は伊達ではないようだ。

「さあ、雑談はここまで。そろそろ時間だよ。いつでも逃げられるように準備しておいてね」

美琴はそう言うと、境内に向き直り、社を刀の切っ先のように鋭く見つめる。普段の彼女からは想像できないが、都もただならぬものを感じ、息を殺して奥を見つめる。

「何かが這うような音。」

「カ、カミコ！ 今の……」

「聞こえたよ。大丈夫、今は警戒する必要はないから。都ちゃんはとりあえず私がいっていうまで動かないで」

明らかに動揺している都に対し、美琴は冷静でどこか分かりきった様子で答えた。

「ずっと、ずっと。」

またあの音。「何か」が、来ている。

「ずっと、ずっと、ずっと。」

奥の本殿から「何か」がついに姿を現した。

「う、ウミウシ？」

そう、出てきたのはナメクジのような見た目で、深く暗い青色をした、しかしナメクジというよりはウミウシの姿をしたなにかだ。一つ違おうとするならウミウシより何百倍もデカいということか。

「ようやくでてきたね。雨の神様『アメフラシ』」

この世のものではないものを目の当たりにして震え上がっている都に対し、美琴は普段通りの口調。どんな神経をしているのか、いや、単に場数を踏んでいるだけかもしれない。

「さてアメフラシ、まずは自己紹介からだね。ほら都ちゃん、名前と職業と好きな物」

こんな状況で自己紹介なんてできるかと怒鳴りたいところだが、ぐっと飲み込み、声をひねり出して張り上げる。

「じ、自分は寺島都！ がくつ、学生だ！ 好きなものはコンピニ！」

「いいね、その調子。じゃあ次、私」

そういうと美琴は鳥居の上に飛び乗って大きいウミウシをまっすぐ見据えて静かに、しかし響く声で、

「私は神野美琴。神を殺す者なり」

彼女は足を大きく振り下ろして、足元の錆びた赤色を踏み壊した。

鳥居を壊す。この行為は神と人間の境界線をなくすということ。つまり美琴はあのウミウシを、神から神未満のものへ強制的に引きずりおろしたのだ。

「だって、こうしなきゃ殺せないわよ。私だって流石に神そ

のものには手が出せない。――都ちゃん危ないっ！」

美琴が飛んできて都を石畳に押し伏せた。

ずどん。

腹の底に響くような重い音。音のした方を見やると、さっきまで都のいた場所に大きな穴が穿たれている。カミコが助けてくれなかったら……背筋が凍る。

「不意打ちなんて卑怯な……！」

美琴はウミウシをキツと睨み付ける。都も睨み付けるが、突然ウミウシの体に数多のぎよろりとした目が開いてこちらをねめつけるので思わずたじろいでしまう。腹の裏から生える触手に生理的嫌悪感を覚える。

「カミコ、勝てそう……!?!」

「勝ち負けの話じゃなくて、絶対殺すの。それが私の仕事だから。それと、もう動いていいよ」

彼女はそう言い残してウミウシと戦い始めた。手に持ったお祓い棒を駆使して襲いかかる触手と穴を穿つ謎の力に対抗している。時折それらが美琴を掠めて、彼女の体には傷がついていく。命を危険にさらしてまで彼女が神殺しに拘る理由は何だろう。これ以上彼女が傷つく前に手を打ちたい。様々な考えが頭の中を駆け巡る。

相手はウミウシ。暖かい海に生息する生き物。ということとは海から引き揚げたり水温を下げたりすれば弱るだろう。しかしここは海ではない。都はあることに気付く。いつの間にか靴が半分水に浸かっていることに。ということはウミウシ

か、この境内そのものが海、奴のフィールドなのだ。では、そのフィールドを奪えばいい。巫女であるカミコの力で。

「カミコ！ 足元水に浸かっているの気づいた!? あいつが海なんだ！ 海を奪うんだ！」

「なに、どういうこと!?!」

触手をいなしながら美琴は聞き返す。

「だからカミコは巫女なんだろ！ 凍らせたり干上がらせたりできる術とか持ってないの!?!」

持っていないと言われたらこの作戦はおじゃんだ。もし、ないなんて言われたらどうしよう。

「ある。あるよ！」

よかった。都はよっしゃあ！ とガッツポーズをした。

「じゃあそれを使ってこの足元の水をなんとかして！」

「わかった！ 都ちゃんは拝殿のほうに上げて！ 都ちゃんまで凍って干上がったらどうしようもないよ！」

水位が増し、ひざまで浸かった重たい足を懸命に動かして拝殿の階段を駆け上がる。ずどんずどんと聞こえる音にあわせて波がたつ。濡れた足で賽銭箱の前までたどり着いた。

「カミコ！ OKだ！」

「よし、じゃあいくよ！」

美琴は俯き、つぶやくように「氷結」と唱えた。びし、と空気の凍る音がする。水は瞬く間に凍っていき、ウミウシの動きが止まった。

「アメフラシ、いい加減観念なさい」

美琴はお祓い棒を地面に向け、「昇華！」と高らかに叫んだ。じゅわ、と音を立てて氷が消えていく。ウミウシは必死にもがいて空を穿ち、触手を美琴の首にのばす。神様だって、死にたくない。都は黙って見ていた。

「おらあ！」

瞬間、美琴の覇気を込めた拳がウミウシにめり込み、聞くのも耐え難い叫びをあげた。美琴はそれすらも聞こえないというような涼しい顔をして何回も何回もウミウシに拳を放つ。

「カミコ……！」

リズムよく聞こえる絶叫に耳をふさぎ、目をぎゅつとつむって耐える都。ああカミコ、なぜお前はそんなことをする？誰かに命じられて？あのウミウシは本当にお前に殺されるだけのことをしたのか？

ひとときわ大きい絶叫が最後だった。やったのか、あいつは。恐る恐る見てみると、あのウミウシがいない。まさか、存在ごとく？

「ねえ……カミコ」

「都ちゃん、おいで。これ見てみなよ」

階段を降りて美琴のそばに行くと、そこには藍の浴衣を纏った一人の男が横たわっていた。

「あのでかいウミウシは、邪念によって肥大化していたからあんな姿だったんだ。でも今はただの人の形さ」

これが、先ほどまで暴れくるっていたウミウシ。美琴はしやがみこんで男の首めがけて手刀を振り下ろした。首が飛ぶ

かと都は身構えたが、肉の断たれる音は……やってこなかった。

「……う、殺さないの……？」

「今はね。なんか、こいつが都ちゃんに話したいことがあるっていうから」

美琴はそう言うと、拝殿の方へ向かい、賽銭箱に腰を下ろした。干渉はしない、だが都に危害を加えるならその時は容赦なく殺すだろう。

「あの、アメフラシ？」

ウミウシでなくなったアメフラシを見下ろして声をかけた。するとアメフラシはゆっくりと体を起こし、都の一度見ただけでは記憶にも残らないような平凡な顔を見た。

「……雨が降っていただろう」

少し目元に皺のある都の父と同い年位に見える男は淡く、霧雨のような声で言った。

「あの雨は俺が降らせていたものだ。梅雨でもないのにな。俺の神社は見てわかるように朽ちている。参拝する者は誰もいない、寂しいところだ」

ぽつりぽつりと雨のように語る。

「ずっと昔、ここには人が毎日参拝しに来ていた」

しかし近年科学の発達により、アメフラシへの信仰は途絶えてしまい、そのせいで神としての力を失ってしまったこと。都は、なんて寂しい神様なのだろうと思った。自分に気付いてほしかっただけなのに。だが都は知っている。科学と神は

共存できないことを。

「俺はな、死にたくなかった。死ねばそれまで。俺が今まで守ってきた者たちはいったい何なのか。だから、邪神になろうとした。邪神なら信仰も要らないし、永遠に生き続けられる」

でもあの巫女に見つかってしまったな、と自虐めいた笑みを浮かべてアメフラシは言う。

「カミコはなぜあんたを殺そうとするんだ？ 雨をふらせていただけなんだろ。なのにどうして……」

ただ雨を降らせるだけでは殺される理由はどこにもないようにみえる。

「じゃあ、このまま雨が降り続ければどうなると思う、少年」

ああ、そういうことなのか。雨が降り続ければいずれ大きな災害が起こり、死人も出るだろう。だからか。美琴がこいつを殺そうとした理由がやっとわかった。でも、でも、

「他に何か、方法はなかったの？」

刹那、都の視界は一転した。アメフラシに組み敷かれたのだ。頭と首を地面に押し付けられ、体に乗っかられた。

「ないからこうしてるんだよ。小娘が」

先程とは打って変わって雷鳴のような、低く恐ろしい声が都を支配した。逆鱗に触れてしまったのだろう、首を押さええている手にぎりぎり力が入る。

「……かはっ、く、くるしっ……」

「なあ、ちったあ考えろよ小娘。雨を降らせるしか能のない

俺に他の方法があるかってんだ。このまま首の骨へし折ってやろうか、おい」

殺意に満ちた目でこちらを見つめるアメフラシ。自分はいつに殺されてしまうのか。そう思った瞬間、

「都ちゃんに手えだすな、この野郎！！！！」

美琴の鋭すぎる蹴りがアメフラシの頭に直撃し、アメフラシが数メートル吹き飛んだ。

「話をさせてあげようとした私が馬鹿だったよ！ 覚悟はできてるんだろうなあ、てめえ！！！！」

今までに見たことのない剣幕で怒り散らす美琴に都はおののき、後ずさった。殺意を全身にまとい、おおよそ巫女とは思えない鬼のような顔でアメフラシを睨む。

「おい立て。立てよ。執行猶予は終わったんだ」

大切な親友を傷つけられた怒りに震える声で言う。アメフラシは蹴られた頭をおさえよるよると起き上がった。美琴は藍の浴衣の襟をつかみ、ぐいと引き寄せた。

「……私は慈悲深いから一瞬で殺してやる」

美琴の左掌に橙の光の玉が生まれる。

「……俺は……」

「うるさい！ 死ね」

「まって、カミコ！」

橙がアメフラシの額に届こうかというとき、都の金切り声

が響いた。まだ血の巡らない体を引きずって美琴の袴に縋る。「まって、おねがい、一つだけ聞かせてほしいの！」

「どうして！ 都ちゃんを殺そうとしたのに！」

「それは、いいんだよ、自分が悪かったから……」

困惑する美琴をよそに、都はアメフラシに向き直った。アメフラシの額からは真っ赤な血がどくどくと流れている。神の血も、赤いのか。

「ねえアメフラシ、生まれ変わりって、信じる？」

唐突な都の問いに彼は一瞬目を見開いたが、すぐに、「ああ、信じている……最も俺は地獄道行きだろうが」

どうあがいても天道には行けない、と半ば自虐的に笑った。嫌じゃないのかと問えば首を横に振った。誰だって、苦しいのは嫌なのだ。それは、人間より上の存在も例外ではない。

「……そう。そうなんだね。聞かせてくれてありがとう」
都はふっと笑って言った。仮に、仮にまだどこかで会うなら、その時はひとつ、世間話でもしようか。美琴にもういいよ、と目配せをする。彼女はアメフラシに歩み寄り、橙を彼の額にあてた。仕える主が道を外れてしまったら、正すのは従者の役目。

「さよなら」

そう言い放つとアメフラシの体がほげけるように消えていく。その表情は、悲しげながらも満たされていた。アメフラシはかすかに頬を緩ませ、

「……悩めよ、少年」

諭す神の声も、ほどけて消えていった。
では、また。

小さな都のその言葉は、誰にも聞こえなかった。

「あんなこと聞いてさ、どうするつもりだったの」

美琴は少し棘のある言い方で聞いた。とどめを刺そうとしたところにあんな風に水を差されてしまったのは、気分は良くない。手水舎で顔を洗っている都は別に、とそっけなく返した。どういう意図であんな質問をしたのかはわからない。唯一絶対の神に生まれ変わりなんてありはしないのに。

「……ところでさ、この神社どうするの。神様いなくなっちゃったよ」

都は袖で水をぬぐいながら聞いた。

「ああ、それは他の神様を祀ることにしてる。次は、そうだね、豊穡の神様にしようかな」

雨は大地を潤し、その大地はやがて大きな実りをもたらす。神を殺した後は、新しい神様を祀る。美琴の役目はそれで終わり。その後はただの高校生だ。

都は、

「……見せたいものがあるって言ってたよね。それもうさ、自分見てる？」

「見てるよ」

死ぬ間際のあの満たされた表情は、救われたから。それこそ美琴の見せたかったものだ。都がどう感じるのか知りたかった。残酷だと思うのか、それとも美しいと思うのか。

「あの顔。満たされた顔。都ちゃんはどう思ったかな」

しばし逡巡したあと、都は困ったように笑った。

「自分はきれいだったと思ったよ。……でも、少し寂しい」

確かにきれいだった。しかし感じたのは美しさだけではない。人間や、自分の過ち、自分を墮とした科学、未来のこと。他にも色々あっただろう想いが浄化できずに残っていたかもしれない。救われても、浄化できないものがあつたのならそれは寂しい。

「……わからないなあ」

都は髪を一つに結いながら、呟いた。たとえ救われても浄化できなかったのならそこに意味はあるのだろうか。

「何が？」

「ん、いや、結局アメフラシは救われたけど浄化されたのになって思ってたさ」

「浄化、ね。多分されてないよ。私ができるのは死という救いを与えることと新しい神様をすすめることだけ。私ひとりじゃ不十分だ。……教えてあげようか、都ちゃん」

美琴は都の両頬を手で優しく包み、

「あの顔の他にも実はあつたんだ。これは見せたいものっていうか、都ちゃんにやらせたいこと」

目を細め、陽だまりの笑顔を向けた。都はその表情に思わず手の添えられた頬を染めてしまう。

「な、何なのさ……」

「さっき都ちゃんの言ってた浄化、それをやってもらおうと思ってるさ。神様のアフターケアだよ」

ぱつ、と手を放し、袴についていた小さなポケットから何やらこれまた小さい木箱を取り出した。少し傷んでいるが、綺麗な箱だ。

「これはアメフラシの御神体。ウミウシのミイラが入ってる。都ちゃんがここに来る前にとっておいたんだ。都ちゃんにはこの御神体を一週間もってほしい。それで浄化は終わるから」

美琴は都に木箱を渡し、石階段を降り始めた。

これを一週間持っているだけで浄化は終わる？ どういうことだろうか。

「ちょ、ちょっと待ってカミコ！ どういう……」

「ほらみて都ちゃん。こんなにきれいな朝日、私見たことない」

都の問いには答えず、町のほうを指さした。山の上にある深見沢神社からは、紅く、宝石のように輝く朝日が見えた。

「都ちゃんは神様が見えた。それがどういう意味かわかる？」

「……自分がそういう奴だったこと。カミコと同じだ」

「大正解」

壊れた鳥居の下の階段に腰かけ、美琴は話し始めた。都が持つ浄化の力のこと、その力とどう向き合うべきか、どう扱うべきか、事細かに話したのだった。

「でも自分もカミコも他の人と変わらないだろ？ それほど気をつけないといけないの？」

夜、美琴のあの姿を見るまでは特殊な力を持つ人間だとは思ってもしなかった。普通に、そこら辺にいる、ちよつと変な奴だと思っていた。

「神と渡り合う力は危ない。下手すれば人間と神の境界を曖昧にしてしまう。私は擬態しているの。普通の人間に」

美琴は静かに言う。その言葉には重みがあった。まるで、実際に経験したかのような言い方だった。

「やらかしたことがあるのか」

「まあね」

へらりと笑って見せたが、その目は全く笑っていないかった。

都は小さくため息をついて立ち上がり、大きく伸びをした。

一応、自分の力については理解した。しかし理解したからといって使いこなせるかといえそうではない。それに、今日は常識の範囲外のことに触れすぎた。

「ふふ、今日は疲れたね。これから一緒に修業していこう。

あ、でも都ちゃんがやりたいならね。無理強いはしないよ」

修業か。悪くない。

「今日のことでカミコの見てる世界に興味が出てきた。もっと知りたい。もっと教えてほしい。いいよね、カミコ」

もとよりオカルトチックなものには興味があった。よもや自分が当事者だとは思わなかったが。都の返事を聞いた美琴は立ち上がり、つま先立ちをして都と目線を合わせた。

「もちろん！」

二人は朝日を浴びながら家に帰る。途中で美琴が朝ご飯を

食べたいと言ったので、カフェに寄った。

柔らかなボサノバの流れる店内は早朝ということもあってか、客は都と美琴の二人だけだった。壮年の店主がいらつしやい、と声をかけた。都はブラックコーヒーとサンドイッチ、美琴はアールグレイとパンケーキを頼んだ。

「一仕事した後のご飯はおいしいね」

「パンケーキをご飯というのはどうかと思うけどね」

コーヒーを口に含むと、芳醇な甘みが舌を跳ねる。恐らくこれはコロンビアだろう。

「コーヒー私も飲みたい。一口くれない？」

美琴は都と同じものを共有したがるくらいがある。いいよ、とカップを渡した。美琴は少し口をつけると、眉をひそめてカップを都の前においた。アールグレイは飲めてもブラックはまだ早かったらしい。

「カミコはこれからコーヒーの修業だな」

「……ん」

からかうように笑うと、ふてくされた表情で美琴は自分のカップにガムシロップを入れた。なるほど、彼女はなかなか甘党らしい。

カフェを出ると、二人はそれぞれの家路についた。今日は日曜日。何も予定は入っていない。スマホで天気予報を見ると、日曜日は一日快晴だった。